

“主の日”

ジェイコブ・プラッシュ

主の日はヘブライ語で「ヤハウエの日」といいます。人間の墮落からその期間までは「サタンの時」です。イエスがサタンを“この世の神”と認識していたその事実は、終わりの時代にさらに強大なものとなるでしょう。神は歴史の中で働かれる神であり、歴史を通してその主権を行使しています。しかし、ダニエル書の記述を読むと反キリストがその実体を現わすとき、彼は時と法則を変えることが出来ると考え、聖徒たちは「ひと時とふた時と半時の間」彼の手にゆだねられるとあります。（黙示録とダニエル書どちらも、歴史の終焉であるその7年間で、2回の「ひと時とふた時と半時」の期間に区分しています。それはおおよそ太陰暦の三年半であり 1260 日です）

この「ひと時とふた時と半時の間」について教えている過去の出来事はたくさんあります。前兆となるもののひとつが預言者エリヤの時代に起こったことです。三年半の間雨が降らなかったことを思い出してください。その期間、エリヤはアハブ王とその妻イゼベルとの争いの渦中にいました。パターンを理解してください。これはユダヤ的なミドラッシュです。ナボテのぶどう畑は取上げようとされていました。エリヤが彼のぶどう畑を守ろうとしたので、イゼベルはアハブをエリヤに敵対させました。よこしまな女が王をエリヤに反抗させたのです。

イエスはヨハネの黙示録の中で、イゼベルを偽りの宗教の象徴として用いています。『あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて誤りに導き』（黙示録 2 章 20 節）

バプテスマのヨハネとエリヤは同じ霊を持っていました。彼らの人格は違ったものでしたが、同じ霊を持ち、同じ油注ぎ、同じ役割、同じ召し、同じ特徴を持っていました。バプテスマのヨハネはエリヤの霊を持って、キリストの来られる前に登場しました。そして、再びよこしまな女であるヘロデヤが“エリヤ”に対して王を敵対させたのです。これは同じパターンです。

これが終わりの時代に起こることのパターンです。現代のクリスチャンはこれを理解する必要があります。ぶどう畑であるイスラエルは取上げられそうになります。教会やキリスト教世界もそのようになります。この時代のまさにその時、エリヤの奉仕はもう一度何ら

かの形で復活します。イゼベルに例えられた世の偽りの宗教システムは、政治体制をもって神の民に敵対するでしょう。エリヤに起こったことはヨハネにも起こり、それは終わりの時代にも繰り返されます。部分的にすでに起こったこと以外は何も新しいことは起きません。しかし、暗に示されていたことは過去ありましたが、終わりの時代はたったひとつの特別な期間になります。もし、何が起こるかを知りたいなら、過去にすでに起きたことに注目してください。預言はパターンです。この理解をもって、「主の日」とはどのようなものであるかを見てみましょう。

主の日

これからイスラエルと教会どちらにも関係のある「主の日」について見ていきます。

『あなたがたは、ある程度は、私たちが理解しているのですから、私たちの主イエスの日には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちがあなたがたの誇りであるということを』（2コリント 1 章 14 節）

この箇所は「主の日」ではなく「主イエスの日」だということに**注意**してください。

新約聖書は、旧約聖書の時代のヘブライ人が部分的にしか理解していなかったことを、深く詳細に説明しています。そして「主の日」はキリストの再来とともに始まることを私たちは知っています。

イエスがオリーブ山で教えられたことを注意深く見てみましょう。

『もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。』（マタイ 24 章 22 節）

ここで使われている「コロボー (*koloboo*) = 少なくされる」というギリシア語はアラム語から訳されたものです。それは「切断する」という意味の言葉です。その日数が少なくされなかったら——その日数が切断されなかったら——ひとりとして救われる者はいないのです。

たとえば足や手先などが壊疽（えそ）してしまった場合を考えてみましょう。

どんな整形外科でも人の手足を切断することを望みません。

しかし骨肉腫（こつにくしゅ）や壊疽になると、体を死なせるか手足を切断するかとい

う問題になり、医者は体を救うために手足を切断します。

この言葉の通り、人類の存続の危機を救うために“中断”という形をとって、主イエスの急激な介入が行われます。最終的に切断が行われるのです。

一旦その中断が行われ、忠実な者たちが取り去られると、神は御怒りを反キリストの王国に注がれます。私たちは「患難」と「怒り」とを区別しなければなりません。それらのギリシア語は異なっているからです。神の民である忠実な教会が主の怒りを経験することは決してありません。しかし、反キリストに協力する者たちは主の怒りを経験するのです。

「主の日」は教会が取り去られたときに起こります。忠実な花嫁であるその教会は、文字通り中断され、この世から取り去られます。その後には神は御怒りを注がれるのです。これが「ヤハウエの日」であり「主の日」なのです。

私たちは、「主の日を待ち望んではいけない」とヘブライ語聖書で言われています。それを切望すべきではありません。私たちはイエスが来るのを切望すべきですが、「主の日」は全く違ったものとなるのです。

バビロン捕囚

ヨエルはバビロン捕囚を最初に預言した預言者です。そして他のイスラエルの預言者と同じように、彼は少なくとも三つの期間について預言してしていました。ヨエルは彼自身の時代、バビロン捕囚に至るまでの出来事を預言し、ときには同じ文脈でイエスの到来と再臨について預言しました。ヨエルのような預言者について読むときに、私たちはいつも、彼自身の時代についての意味、それにキリストの到来と再来についての意味、またその組み合わせについての意味を気付かなくてはなりません。バビロン捕囚で起こったことは終わりの時代に何が起こるかを私たちに教えているのです。

ネブカドネザルはユダヤ人の神殿を汚し、偶像を建てました。もし、あなたがアラム語での寸法を読むことが出来るなら、その偶像は600と66の大きさだったということが分かります。ネブカドネザルは捕囚前のユダヤの最期において、美しい地に入りました。そのころ民は指導者たちに惑わされていたのです。そこではエレミヤやバルクのように真実を告げる者は限られていました。一般的な民衆は「勝利は目前だ」とか「祝福が来る」、「繁栄が待っている」と言うようなにせ預言者たちに聞き従っていました。このようなことを預言者たちが告げていたのです。しかし、エレミヤのような者は正反対のメッセージを伝えていました。終わりの時代も同じようになります。ほとんどのキリスト教界はにせ預言者について行き、真実を告げる者たちを拒みます。イスラエルは神が福音を宣べ伝えさせ

るために遣わしたメシアニック・ジューたちの真理の声を拒むでしょう。そして、むしろラビたちの欺きに従うことを選ぶのです。そのとき起こったことが再び起こります。

再び起こる

バビロン捕囚の時のユダヤの地に起こった、そのまさに同じことが紀元 70 年にも起こりました。イエスはオリーブ山で教えられたとき、何よりも先に紀元 70 年のことについて預言していました。『一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。』(ルカ 19 章 44 節)

ニムロデがバベルの塔を建てたときに始まった神秘宗教は、後に小アジアに広がり、特にペルガモの都市まで到達し(『そこにはサタン王の王座がある』黙示録 2 章 13 節)、そこからギリシャ・ローマ世界へと入りました。今日でもその神秘宗教は、フリーメーソンやローマ・カトリック、ギリシア正教会などに残っています。しかし、そのルーツはバビロンにあります。初期のクリスチャンたちは、これらの神秘宗教の新しい住み家がローマとなったので、ローマをバビロンであると認識していました。こういう理由で、ペテロがローマから書いた書簡の中では、『バビロンにいる、あなたがたとともに選ばれた婦人がよろしくと言っています。』(1 ペテロ 5 章 13 節) と書いたのです。

バビロン人たちは第一神殿をアブの月の 9 日(ティシュラー・ベ=アープ)に破壊しました。おおよそ 8 月 9 日です。エレミヤが預言した通りに彼らは町を取り囲みました。同じように、紀元 70 年のまさに同じ日であるアブの月 9 日にローマ人たちは第二神殿を破壊しました。第一神殿と第二神殿は同じ日に破壊されたのです。しかし、これがバビロンに関して起きたのと同じことだと認識していたのは初期のクリスチャンたちだけでした。ユダヤ人信者たちはちょうどイエスの言われたことを思い出してそこから逃れました。『エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。』(ルカ 21 章 20 節-21 節)

携挙の象徴

使徒ヤコブが殉教の死を遂げてのち、イエスのいとこでシメオンと呼ばれる人がエルサレムの教会の監督となっていました。ローマ人たちはどういうわけかそのとき一時的に包囲を撤退させていました。そこでユダヤ人信者たちは(ペトラではなく)「ペラ (*Pellah*)」と呼ばれる場所に逃げました。彼らはそれが携挙に至ると思っていたのですが、実際にはそれは携挙の象徴であり、彼らはそこから逃れ出たのです。エルサレムに来る災難から逃れ出たその信者たちの様子は、終わりに何が起こるかを描き出しています。

「主の日」がどのようなになるかを知りたいければ、ヨセフスの『ユダヤ戦記』を読んでみてください。信者たちが逃れた後のエルサレムの中で起こったことは、全世界に起こることの縮図です。飢饉が耐え難いくらいにひどくなったので、女の人たちが後産をめぐる争ったほどだったのです。そして、人々はあまりにも食べる物が無いので、女の人たちが子どもを産むのを待っていました。これがエルサレムで起こったことです。それだけではなく、仲間であった自分の民、シキム人——熱心党員たちはローマ人よりも野蛮でした。これはただ町の外で起こっていたことではなく、町の中も大変な状態でした。「主の日」は、紀元 70 年に教会が取り去られた後にエルサレムで起こったことによって、あらかじめ示されていたのです。

聖書の中で、「主の日」がどのようなになるかを教えている箇所は他にも多くありますが、私たちは紀元 70 年に起こったことに注目してみましょう。イエスに従った者だけが脱出し、他の者は残り、悲惨なことが起こりました。そして、それは再び起こるのです。紀元 70 年にローマ人が神殿を破壊したときに、彼らは至聖所がかつてあった神殿の丘でローマ帝国の象徴である鷲の旗を掲げました。信者たちが逃れ出てから、それが「シキューツィム・メショメム (*shiqqutzim meshomem*)」すなわち「荒らす忌むべき者」であると認識していました。そうです、その時起こったことは終わりに起こることの縮図であり、予型、象徴なのです。

ヨエルはバビロン捕囚について預言しました。ヨエルが預言した時代に起こったことは終わりの時代に起こることの象徴です。しかし、それは部分的に紀元 70 年に成就したことであります。イエスがマタイ 24 章のオリーブ山で警告された紀元 70 年に起こったことは、「主の日」がどのようなになるかを示しています。それはエルサレムだけの地域的なことではなく、地球全体に関してのことなのです。その様な状況を全世界の人々が経験します。全世界の人々が食べる物を求めて、妊婦のお腹からの後産をめぐる争うということを果たして想像出来るでしょうか？どのようなになるのでしょうか？ヨセフスの記述を読むと、それは衝撃的でおぞましいものだということが分かります。

エレミヤはこのことについて悲しみました。哀歌はヘブライ語で「エーハー (*Eichah*)」と呼ばれており、それは神殿が破壊されたアブの月の 9 日に朗読されます。今日に至るまでシナゴグでは、この神殿の崩壊を悲しんだエレミヤの哀歌「エーハー」が、ラビたちによって儀式的に読まれています。しかしエレミヤはその状況から逃れることができました。仲間たちと逃れたのです。このようなことが起こる前には、忠実な者たちはいつも脱出することができます。

昆虫

ヨエルはダニエルが獣を用いたように、昆虫を用いて表現しました。

『かみつくいながが残した物は、いなごが食い、いなごが残した物は、ばったが食い、ばったが残した物は、食い荒らすいなごが食った。』（ヨエル 1 章 4 節）

これらの昆虫は国家の侵略を象徴しています。ダニエルはたいてい獣を使い、ヨエルは昆虫を使いますが、黙示録はどちらも用いています。この箇所では別々の 4 つの昆虫の群れが出てくることに注目してください。ユダヤ人へのバビロン捕囚は 4 回の侵略によって行われました。ネブカドネザルとバビロン人たちは 4 回侵略し、回数を経るたびに、ユダヤ人を国外へ追放する度合いも激しくなっていました。

この計画的な国外追放という考えは、まさしく 1930 年代と 40 年代のホロコーストで行われたことでした。彼らはユダヤ人のゲットーの周りに壁を建造し、最初はある人数を強制移送し、2 回目にはまたある人数を、3 回目にもそのようにし、最後には残りのユダヤ人を強制移送しました。これが 1930 年代と 40 年代にナチの強制収容所で実際に起こったことであり、まさにネブカドネザルと同じような悪霊に導かれていたのです。

終わりの時代の欺き

5 節ではこれらのいなごの 4 つの群れが何をするかを見てみましょう。ヨエルは何と言っているのでしょうか？

『酔っぱらいよ。目をさまして、泣け。
すべてぶどう酒を飲む者よ。泣きわめけ。
甘いぶどう酒があなたがたの口から断たれたからだ。』（ヨエル 1 章 5 節）

(※編集者注・以下に出てくるのは、1990 年代のアメリカやイギリスで起こった事例です
著者はペンテコステ派・カリスマ派の中にある欺きに関して大きな懸念を抱いています)

今日、キリストのからだに対して行われている欺きを理解してください。「経験に基づいた神学」が人気を博しているのです。この現代の“新しい波”はヴィンヤード教会の以前の指導者だったジョン・ウィンバー (*John Wimber*) から端を発しています。彼は、元々

カルバリーチャペルに属していましたが、聖書からではなく経験に基づいて教え始めたので、チャック・スミス (*Chuck Smith*) が彼を退会させました。ウィンバーは神秘主義やグノシース主義、ニューエイジの哲学に陥り、それらをキリスト教用語で包んでいたのです。

ウィンバーは後にカンザス・シティから出た、自らを預言者と称する者たちと手を組みました。彼らのひとりであるマイク・ビックル (*Mike Bickle*) はエリヤが天に上げられたことは裁きであって、「エリヤが否定的過ぎた」ので、神さまは裁きによって彼を取り去らなければならなかったのだと主張しています。(教会が携挙されることを彼らは否定していたので、エリヤの携挙も否定します)

その“預言者たち”のうちのひとは、ボブ・ジョーンズ (*Bob Jones*) という人で彼はその“預言者”としての権威を使って、女の人衣服を脱がせていたことが発覚した男であり、またポール・ケイン (*Paul Cain*) という人は最近、アルコール中毒と、同性愛者であることが明らかになりました。

ポール・ケインやジョン・ウィンバー、マイク・ビックルらは、1990年8月にロンドンで大きな集会をするためにやって来ました。彼らは「後の雨 (*Latter Day Rain*)」が間もなく起こり、「神の子たちの現れ (*Manifest Sons*)」があり、神の御霊が激しく注がれると宣言しました。そのリバイバルはイギリスに始まり、のちにドイツそして、ヨーロッパ大陸でも広がると言ったのです。

私は偶然イギリスに住んでいたため、その“偉大なリバイバル”が1990年8月に預言されてからの事を証することが出来ます。イギリスにおいて、教会と比べて5倍の数のモスクが建てられました。1990年から教会はいくつか建てられましたが、その5倍の数のモスクが出来たのです。そうすると、メソジスト派の教会が一週間毎に1つ教会を閉じ、イギリス国教会が2、3の教会を閉じている一方で、イギリスでは一週間に1つはモスクが増えていることとなります。彼らは偽って預言しました。彼らはありもしないことを告げ、それを主の御名によって行ったのです。悲しむべきことに、多くの超カリスマ派の人たちはこのようなアルコール中毒者や同性愛者たち、自分に都合の良いことを言ってくれる者たちに従っていました。

人々は彼らを応援し、これが「後の雨」であり「神の子たちの現れ」だと信じていたのです。それに加えて、彼らは自身が「食い荒らすいなご」であると公言し続けてきました。次の5節を見てください。

『酔っぱらいよ。目をさまして、泣け。』

そのカンザス・シティからの一団に従った教会は、カナダのトロント (*Toronto*) やフロリダのペンシコーラ (*Pensecola*) などから来た、欺く人たちにも従いました。彼らはまた、南アフリカのロドニー・ハワード・ブラウン (*Rodney Howard-Browne*) という人も褒め称えました。彼は「ヨエルの居酒屋で酔う (*Drinking at Joel's Place*)」という彼自身のテーマソングを持っており、人々に“聖霊”に酔うことを勧め、抑えることのできない笑いのような状態に陥りました。

これが彼らのヨエル書について語っていることです。それでは、ヨエル書自体がどう証言しているかを読んでみましょう。彼らは「酔え」と言いますが、ヨエルは「酔いを覚ませ」と言います。彼らは「笑え」と言いますが、ヨエルは「泣け」と言います。かつてひとつとして、笑うことから始まったリバイバルはありません。全てのリバイバルは人々が悔い改めのために泣くことから始まるのです。

リバイバルは起こるのでしょうか？

終わりの時に大きなリバイバルはあるのでしょうか？聖書はリバイバルについてよりも、かなり多くの部分を終わりの時代の背教に費やしています。ただし、この時代にイスラエルとユダヤ人に対して、もう一度聖霊があふれんばかりに注がれるのは事実です。けれども、その時というのは「ヤコブの苦難 (訳注…エレミヤ 30 章 7 節)」の時です。「ハテクファ・ハ・ツォラト・ヤコーブ (*HaTekufa ha Tsorat Yakov*)」のときは彼らの歴史の中で暗黒の期間であり、とても幸福な時であるとは言えません。

もし、リバイバルが起こるなら、それはバビロン捕囚の以前に起こったものようになるでしょう。それはどのようなものだったのでしょうか？ヨシヤ王の時のリバイバルです。罪がとても反逆的になり、特にヨシヤが止めさせるまでは、マナセ王のもとのモレクをはじめとする悪霊に自分の子どもを捧げるような虐殺が横行していました。そしてリバイバルから悔い改めが生じて、彼の忠実さのために、ヨシヤの生きている間には斧は下ろされませんでした。それでもやはり下ろされなければならないと神は言われました。全てがもう手遅れだったのです。

私はリバイバルが来ることはないとか、「主の日」が延期されると言っているのではありません。しかし、斧は必ず下ろされます。考えてください。アメリカでは「ローとウェイド裁判 (妊娠中絶が認められた裁判)」があつてから、病気の治療とは関係なく、4000万人の赤ちゃんが中絶されました。もしそのような事がなかったなら、社会保険制度も支障を

きたすことはなかったでしょう。その「ローとウェイド裁判(*Roe vs. Wade*)」の責任がある同じ世代が今度は、自業自得ですが、安楽死を次の論争の種にしようとしているのです。公的な医療制度への負担は社会保障に寄りかかってくる。「開発された治療薬があるとしても、これらの人を80代まで生かすことはできない。——彼らには亡くならなくてもいいと困る。」と彼らは言います。このことを注意して聞いてほしいのですが、もしこの人たちの言っている通りにならなければ、制度も“自発的な”安楽死から、“不本意”な安楽死になることでしょう。中絶された胎児が何の選択権も持たなかったのと同じように、それを行った世代も何の選択権も持っていないのです。彼らは自分の蒔いた物の刈り取りをします。神の裁きが西欧諸国に来るのは避けられません。プロテスタント民主主義はそれを経験しなければならないのです。

もし、リバイバルが来るなら、その裁きを遅らせることがあなたの出来る最大のことでしょう。御怒りは極みに達しました。「もし、わたしの名をもって呼ばれているわたしの民が、立ち返り祈るなら、彼らの地をいやそう」と言われていることは事実です。しかし、それはヨシヤの時代にあったようなものでしかないのです。もう手遅れです。こう言うのはリバイバルのために祈ってはいけないという意味ではありません。もちろん祈るべきなのですが、ただそれが起こるときは、裁きを遅らせるだけであることを理解してほしいのです。それはもう少しの人が救われるためのチャンスです。神は最終的には、昔からの民であるイスラエルに恵みを増し加え、恵みを返されます。

酔いを覚ませ

そのようなリバイバルが起こるためにヨエルは「酔いを覚ませ」と言いました。今日、主要な教派は人々に「いや、酔いなさい」と教えています。酔いを覚ますとはギリシア語でソブレイゾー (*sobreizo*) という言葉です。私たちは自制を身に着けるべきです。実に、御霊の実は自制——エンクラテイア (*egkrateia*) なのですが、あの人たちは自制を無くせと教えています。もし、ある人が自分を制することが出来なければ、聖霊も彼を制しておられません。

私は仕事の関係で、一番最近の偽のリバイバルが起こっていたオンタリオ州のトロントに行き、そこで見たものは、屋根の上に十字架を付けた精神病院でした。そこで私が最初に気付いたことは全ての人がイエスのことは話さず、みな自分たちの経験のことを話しているということでした。そして彼らは、「自分ではどうにもならない！止められないんだ！」と言っていました。そう、彼らがそれを制することが出来ないのは、神さまからのものではないからです。御霊の実は自制です。

あるアルコール中毒者だった人がクリスチャンになり、その中毒から救われたとしましょう。もし、その人がまた居酒屋や飲み屋に行って飲み始めたとしたら、それは聖霊によって自制心が与えられているといえるでしょうか？いいえ、その人にとって酒は死をもたらす物なのです。もし、聖霊が彼に自制心を与えているのなら、彼自身が自分を制することが出来るのです。人が罪を犯すとき、その瞬間には聖霊の与える自制心はそこにはありません。聖霊を悲しませているのです。御霊の実は「エンクラテイア (=自制)」です。「それを抑えられない！だから神さまに違いない！」「違います。抑えられなかったからこそ、神さまではありません」あの人たちは聖書と全く正反対のことを教えています。

現在、その狂気じみたことは下火となっていますが、その異端の群れは次の“聖霊の波”を期待し、それが実は悪霊であることに気付きません。金齒と奇妙な輝きなどのしるしや不思議を彼らは求め、次回もまた見せ物のようなものを望むのです。

角笛を吹き鳴らせ

ヨエル書の2章は主の日を説明し、角笛を吹き鳴らせという命令をもって始まります。

『シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。
この地に住むすべての者は、わななけ。主の日が来るからだ。その日は近い。』(ヨエル2章1節)

イエスはオリーブ山において同じ事を繰り返し預言しました。

『主は、ご自身の軍勢の先頭に立って声をあげられる。
その隊の数は非常に多く、主の命令を行なう者は力強い。
主の日は偉大で、非常に恐ろしい。だれがこの日に耐えられよう。』(ヨエル2章11節)

しかし、彼らはシオンで角笛を吹き鳴らしはしません。この箇所はヘブライ人の例祭であるラッパを吹き鳴らす祭りと象徴的に同じものです。今日、ラビたちは聖書の記しているラッパを吹き鳴らす祭りに全く違う意味を与えています。『町で角笛が鳴ったら、民は驚かないだろうか。』(アモス3章6節)それは聖なる会合であり、警告なのです。ユダヤ人たちが大患難のためにイスラエルへ再び集まるためのものです。ユダヤ人たちはイスラエルへピクニックや祝福のために上るわけではありません。彼らは反キリストに騙され、死との協定を結び、彼らのうちの三分の二は虐殺によって地から除き去られるのです。

私の子どもたちはガラリヤで生まれ、ガラリヤ生まれのユダヤ系イスラエル人です。私はイスラエルとユダヤ人に対する神の預言的な目的を固く信じ、イスラエルが国家として存在する権利を認めています。私はアメリカや他の国がイスラエルに圧力をかけて、イスラムの蛮行におとなしく従っていることに驚いています。それでもなお、平和の君がいなければ本当の平和は来ないと私は思い続けています。メシアの贖い無しに祝福はありえません。

ユダヤ人たちが飛行機や船に乗ってイスラエルに行くことは、アウシュビッツやブーヘンヴァルト収容所行き列車に乗っているようなものなのです。自らを“クリスチャン使節団”と名乗っている団体があり、彼らは自分たちが鷲のつばさだと言い、「ユダヤ人をイスラエルに連れて行けば、神さまが救ってくれる」と思っています。イスラエルにいるユダヤ人の三分の二は滅ぼされます（ゼカリヤ 13 章 8 節）。

もちろん、すべてのイスラエルは救われます。自分たちが突き刺した者を見上げる者は救われます（ゼカリヤ 12 章 10 節）。しかしそうしない者たちは殺されるのです。ユダヤ人たちはメシアであるイエスを必要としています。ユダヤ人に福音を伝えない団体や奉仕を何も支援しないでください。

ラビたちは角笛の意味を変えてしまいました。現在、彼らはそれを何と呼んでいるか知っていますか？「ロシュ・ハシャナー＝*Happy New Year*」です。しかし、聖書的には「オイ・ブ・ヴォイ (*oy v'voy*)」すなわち「悲しみに悲しめ」と言うべきなのです。角笛が吹き鳴らされた時、人々は恐れるべきです。「オイ・ブ・ヴォイ (=悲しみに悲しめ)」と言う代わりに、ラビたちはユダヤ人に向かって「*Happy New Year!*」と言っています。

もし教会の指導者たちが人々に酔いを覚ませと言う代わりに、酔えと言っている状態ならどうしたら良いのでしょうか？そして、ひれ伏して泣く代わりに、彼らはひれ伏して笑えと言っています。イスラエルは盲目になっています。教会も盲目になっています。わずかですが小数の残りの者、増えつつある残りのユダヤ人たちは、イエスがメシアであるという真実を認識しています。その割合は今日の教会の中におけるものと何ら変わりません。ほとんどの教会と教派は、みな次々と登場する流行に従っています。ペンシコーラや金儲けの福音 (*Prosperity Gospel*)、リック・ウォレンの人生を導く法則 (*Purpose Driven*)、アルファ・コース (*Alpha Course*)、エマージェントの対話など、何でも人気があり、非聖書的なら彼らはそれを試みているのです。

イエスは率直に言われました。『これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上になげなさい。贖いが近づいたのです。』(ルカ 21 章 28 節) 黙示録は聖書の中で、これを読む者には特別な祝福があると約束されている唯一の本です。今日、中東やヨ

ヨーロッパで起こっている出来事、たとえばヨーロッパの再統合などは、まさにダニエルが起こると語ったことそのままです。『これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上になげなさい。贖いが近づいたのです。』『主の日』が近づくとつれ、人々は誰の言うことに耳を傾けるのでしょうか？それはカルフォルニアで自らの世界平和の計画を持ち、聖書の預言を学ぶなど言っているリック・ウォレンと呼ばれる男です。預言は本来の道から目をそらせるものだとリック・ウォレンは言っています。しかし、イエスはこれらのことが起こるのを見たなら、この書（黙示録）に戻り、何が起こるかを理解しなさいと言いました。

増大する欺き

「主の日」が近づくとつれて、神さまの計画の中では 3 種類の人たちがいます。それはユダヤ人、異邦人の国々、それにユダヤ人と異邦人で構成される教会です。

サタンはユダヤ人を欺くのに成功しました。忠実な残りの者たちを除いては、彼らは自分たちのメシアを認めなかったのです。国々も騙されました。残されたのは教会です。サタンはあなたと私を騙そうと企んでいます。

オリブ山で弟子たちがイエスに『あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。』（マタイ 24 章 3 節）と聞いたとき、イエスは、戦争や戦争のうわさについては一度言い、飢饉も一度、地震も一度、疫病も一度、迫害についても一度言われただけでしたが、選民に対して行われる欺きについて四度警告されました。実に彼の口から出た最初の言葉は『人に惑わされないように気をつけなさい。』でした（ギリシア語での対象は“あなた”です）。イエスはあなたや私に対して、あなたの家族や私の家族、あなたの教会や私の教会に対して行われる欺きを警告しているのです。彼は他のどの前兆よりも、そのことを私たちに四倍も警告されています。

私がまだ若い信者だった 70 年代初期に、なぜそのころが終わりの時代であると考えているかを聞かれていたならば、私は「イスラエル、ヨーロッパの共同市場、環境破壊、世界経済のグローバル化のためだ」と答えたことでしょう。当時でもそのようなことを言ったのですが、私は未だかつてないほど現代においてこのような要因が預言的に重要であると、より確信を持っています。しかし、それらはもはや、一番明らかなしるしではなくなりました。イエスの再臨と「主の日」の到来の明らかな前兆は、選ばれた者に対しての欺きです。その欺きを信じ受け入れる人の数も、その質も、驚くべきものとなっています。

聖書では自制しろと書いてあるのに、自制を無くして良いとどうして本気で考えることが

できるのでしょうか？イエスは預言を学べと言われたのに、預言を学ぶなどどうして正気で言うことが出来るのでしょうか？欺きが蔓延しています。ユダヤ人は騙され、教会も今にも騙されそうです。「角笛を吹き鳴らせ」。「*Happy New Year*」ではなく「オイ・ブ・ヴォイ（＝悲しみに悲しめ）」なのです。

いなごの軍隊

ヨエル書 2 章では、バビロンの軍隊がいなごに象徴され、黙示録でもそれが現れます。言い換えると、ネブカドネザルに起こったことは終末論的に未来に（黙示録で）起こることの予型なのです。バビロン捕囚で起こったことは再び起こります。黙示録 9 章には、

『第五の御使いがラッパを吹き鳴らした。』とあり、

（ラッパが何であるかを思い出してください）

『すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。』

ヨエル書では何と言っていますか？『太陽も月も暗くなり、星もその光を失う。』（ヨエル 3 章 15 節）

『その煙の中から、いなごが地上に出て来た。彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。』（黙示録 9 章 1 節－3 節）

ここでいなごが再び現れます。以前これらのいなごは何をしたのでしょうか。とすると、教会は何をすべきなのでしょう。私たちはこれを見て、人々にイエスが戻ってくることを警告すべきなのです。「それはしてはいけない」「預言を学ぶことは道をそらせることだ」とリック・ウォレンは言うでしょう。このいなごは反キリストの悪魔の軍隊です。バビロンの軍隊で文字通りの成就をしたこのいなごは、黙示録 9 章での反キリストの悪魔の軍隊です。私は何万人ものいわゆる新生したクリスチャンたちが、スタジアムで集まってこう歌うのを聞きました。

「町を走り 城壁をよじのぼる

彼のことばを運ぶ軍隊は偉大だ」（ヨエル 2 章 9 節参照）

彼らは自分たちのことを歌っていると思っていました。それらは偉大な軍隊である「父のいなご」です、ヤハウエの軍隊とも呼ばれていますが、その軍隊はバビロン人が行ったように、神がご自分の民を悔い改めさせるための軍隊なのです。その人たちは自分たちのことを歌っていると思っていましたが、実は反キリストの悪魔の軍隊のことを歌っていたのです。

教理の欠如

「(歌として) 角笛を吹き鳴らせ。ほら、“後の雨”や“神の子たちの現れ”、“マンチャイルド”、“神の国はいまここに (*Kingdom Now*)” というようなものが来ている。」と彼らは歌いました。リック・ウォレンの全世界のピース・プランはただ「神の国はいまここに」という教えに他なりません。後千年王国説に陥り、経験や感覚や神秘主義に基づいた超カリスマ主義など、彼らは教理を何も持っていないのでそうになってしまうのです。

では、彼らはこのような教えをどこから得ているのでしょうか？彼らは超カルバン主義の再建主義者たち、例えば、ローザス・ラシュドニー (*Rousas Rushdoony*) やデイビッド・チルトン (*David Chilton*)、グレッグ・ボンソン (*Greg Bonson*)、ゲイリー・ノース (*Gary North*) などに従います。再建主義者とは、教会が政府や金融機関を支配し、イエスが再臨する前に神の国を建て上げるべきだと信じている者たちです。

真実のピース・プランがあることは事実ですが、リック・ウォレンの「世界平和のための5つのピース・プラン (*PEACE Plan*)」の何が私の頭を悩ませるかということ、それは神さまのプランではないからです。それはもっぱら教育や社会福祉に関してであり、それがすべてなのです。そして、福音について何も語りません。救いについてさえ何も語らないのです。また、彼の協力者は2006年11月27日のフォックス・ニュースの報道によると、ビル・ゲイツ (マイクロソフト社の共同創業者：世界長者番付で長年一位を独占する人物) やルパート・マードック (オーストラリア生まれ：アメリカのメディア王) やメル・ギブソンなどであり、彼らがその資金源なのです。

イエスは警告しました。『祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。』ヒンドゥー教ではそれはマントラ (呪文) であり、それは何度も何度も何度もくり返されるのです。カトリック教国では、それはロザリオ (数珠) を用いた祈りであり、「マリヤの賛歌 (*Hail Mary*)」などは50回以上も単調にくり返されます。彼らに「見てください。マリヤは救い主が必要であると言いましたよ。」と言っても、多くのロザリオの祈りによって思考がプログラムされているので私たちに耳を傾けようとしません。ヒ

トラーの広報役だったゲッベルスは言いました、「ひとつの嘘を十分くり返すなら、人々はそれが真実だと信じる」。彼らはマントラに入り込んでいます。それゆえ「セブン・イレブン・コーラス (7-11 choruses)」とある人が呼ぶようなものが存在します。彼らは7つの単語を11回くり返します。これらの人たちは教理をどこから得ているのでしょうか？マントラのように無分別に歌うことによってです。みことばが解き明かされることもなく、彼らはただ同じことを何度も何度も歌うのです。しかし、その歌っていることが聖書的でないことさえも気付くことがありません。マントラによるように放心状態になっており、ヒンドゥー教と違うところは何らないのです。

東からの侵略

西洋の教会に東洋の宗教が浸透——侵略——したのはこれで三度目です。エレミヤは5章でそれを警告しました。「わたしの民は東からの影響で満ちている」。

最初にそれが起こったのは、ニカイア公会議後の教父の時代であり、特にアレキサンドリアにおいてです。それが西洋のキリスト教会に対する初めてのグノーシス主義を伴った東洋宗教の侵略です。

二度目は、十字軍の時代に彼らが、ヒンドゥー教やイスラム教の神秘主義の影響をヨーロッパに持ち帰ったときです。小さい女の子の初めての聖餐式において、その子が花嫁のように着飾り、ビーズによって祈りを数えるという習慣はすべて、イスラム教やヒンドゥー教を真似したものです。修道院や修道会で見られる自責などは、イスラム教シーア派からのものです。それが二度目でした。

そして、これが西洋の教会が、東洋の宗教によって侵略される三度目なのです。

2004年にサン・ディエゴで開かれた、国際聖職者会議での基調講演者はリック・ウォレンでした。しばしの休憩があった後、次のセッションはヨガ特集でした。これらを行っているのは福音主義の牧師たちであり、彼らは自分たちが何をしているか、分かっていないのです。

かの日が盗人のように私たちにふりかかってははいけません。イエスはそのようにやってきましたが、私たちにとってそうであってははいけません。人々は動揺し、驚きますが、私たちにとってはそうなるべきではないのです。私たちは何をしておくべきなのでしょう？

正しい文脈

ヨエル 2 章

『シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。』(1 節)

15 節：

『断食の布告をし、きよめの集会のふれを出せ。
民を集め、集会を召集せよ。
老人たちを集め、幼子、乳飲み子も寄せ集めよ。
花婿を寝室から、花嫁を自分の部屋から呼び出せ。』(15 節-16 節)

このことには理由があります。イエスがめとったり、嫁いだりすることに警告を与えたことを思い出してください。

『主に仕える祭司たちは、神殿の玄関の間と祭壇との間で、泣いて言え。
「主よ。あなたの民をあわれんでください。
あなたのゆずりの地を、諸国の民のそしりとしたり、
物笑いの種としたりしないでください。』(17 節)

文脈を離れて、つながっている箇所から孤立した本文はいつも“こじ付け”です。サタンはみことばの文脈を離すのが大の得意です。イエスに対して行ったことに注目してください。サタンはそれを試みました。マタイ 4 章でのサタンとイエスの議論は、すべて申命記に関することです。サタンは文脈から離れて引用しますが、イエスは文脈に従って答えられます。サタンが申命記から取り上げたので、イエスも申命記からすべてお答えになりました。サタンはある特定の箇所を、文脈から離れて使うのが得意なのです。

それと同じように、彼らもヨエル 2 章 28 節から引用された使徒 2 章の、ペテロの教え(カリグマ)を注目するのです。

『終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。』(使徒 2 章 17 節)

これは事実です。しかしまず初めに、文脈において、この箇所は主にイスラエルとユダヤ人に焦点を合わせています。第二に、これは苦難の前にあることではなく、それに続くことです。彼らはこの大きな嘘に賛成しています。

あなたに関係があるのでしょうか？

最近、私はハワイの空港にいるとき、世界でも有数の詐欺師であり、にせ預言者で、お金のために説教している者と主によって会うことが出来ました。目と目を向かい合わせて、私は彼に「あなたはにせ預言者だ」と言い、「あなたが主の名によって告げたことが起こらなかったことを証明できる」「悔い改めて、その奉仕から身を引くべきだ」と言いました。私が彼に何を言ったかはあまり問題ではありません。ベニーは聞こうとしませんでした。これは、彼にそう言うべきではなかったという意味ではありません。エゼキエルは彼らが聞かなくても、とりあえず言えと言いました。それは起訴状を提出するようなものです。しかし、彼らは聞こうとしません。彼らは気にかけないのです。しかし大切なのは、あなたがそれを気にかけますか？ということです。ここから脱出するチケットがほしいですか？「主の日」は近づいているのです。

メッセージがあります。それは「酔いなさい」というものや、自制を失うこと、「*Happy New Year*」でもなく、あなたの聖書を読みなさいということです。ホセア書では何と云われているのでしょうか。『角笛を口に当てよ。』(8章1節)

『シオンで角笛を吹き鳴らし、
わたしの聖なる山でときをあげよ。
地に住むすべての者は、わななけ。
主の日が来るからだ。その日は近い。』(ヨエル2章1節)

あなたはニュースを見ていますか？「主の日」が近いことが分かります。しかし、世界的に有名な説教者たちは、羊の群れに全く反対のメッセージを伝えています。それらの羊が、自分の羊飼いによって狼に投げやられているのだとしたら、彼らが逃れる機会は一体あるのでしょうか？

しかし、メッセージはこれです。「主の日」は確かに近づいているということです。

『シオンで角笛を吹き鳴らせ。
断食の布告をし、きよめの集会のふれを出せ。
民を集め、集会を召集せよ。
老人たちを集め、幼子、乳飲み子も寄せ集めよ。』

イエスが乳飲み子を持つ母親たちについて語ったことを思い出してください。

『花婿を寝室から、花嫁を自分の部屋から呼び出せ。』（ヨエル 2 章 15 節－16 節）

『シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。
地に住むすべての者は、わななけ。
主の日が来るからだ。その日は近い。』（2 章 1 節）

『主に仕える祭司たちは、神殿の玄関の間と祭壇との間で、
泣いて言え。「主よ。あなたの民をあわれんでください。』（2 章 17 節）

シャローム。